

伊藤整の直筆原稿「日露開戦譚」、小林多喜二の新記事、および大正時代末の小林多喜二の小説

倉 田 稔

目 次

- 1 伊藤整の全集未収録・作品未収録原稿「日露開戦譚」
- 2 『小林多喜二全集』や単行本に未収録の、新資料。多喜二本人が執筆した文章
- 3 大正時代末の小林多喜二の小説
 - はじめに
 - 本文
 - むすび

1 伊藤整の全集未収録・作品未収録原稿「日露開戦譚」

小樽商科大学附属図書館が、1997年末に、種々収集した書物・資料の中に、伊藤整（1905—1969）の直筆原稿「日露開戦譚」がある。

これは、同図書館（＝筆者）の調べでは、『伊藤整全集』（新潮社）の中に入っていなかった。そこで、伊藤整の研究者として日本で第1人者である曾根博義先生に教えを受けたところ、まさに全集未収録作品であり、また作品未収録原稿でもあった。

そこで、その原稿を発表したい。伊藤整研究に資するであろう。草稿は、400字詰め原稿用紙10枚に書かれている。曾根博義先生も、この筆跡は整に間違いはない、と言う。

これは、はじめ全4回にわたって、『らぶおたる』1998年9月から12月（小樽・坂の街出版）で紹介したが、不備な点もあった。また、1998年7月23日の『北海道新聞』朝刊に、次のような記事が出た。それをそっくりそのまま

紹介しよう。

小樽商大図書館所蔵

伊藤整の直筆原稿

研究者「貴重な資料」

[小樽] 小樽商大附属図書館（館長・倉田 稔教授）が所蔵する、小樽ゆかりの作家で同大の前身・小樽高商の卒業生でもある伊藤整（一九〇五—一九六九）の直筆原稿が、これまでに単行本や全集に収録されることがない貴重な原稿であることが二十二日までに分かった。研究者の日大文理学部の曾根博義教授が確認した。

原稿はA4版の四百字詰め原稿用紙十枚、同図書館が昨年末、札幌の古書店から購入した。一枚目の最初に「日露戦争譚 伊藤整」とあり、日露戦争開戦時の中国・旅順の様子を記している。曾根教授は「筆跡から自筆であることは間違いない。原稿の内容は初めて目にするものだ」といい、貴重な資料だと位置づけている。曾根教授によると、第二次大戦中に執筆されたらしい。

以上である。

曾根博義先生は、『未刊行著作集 12 伊藤整』（白地社 1994年）を出しているが、その本文にも巻末の「未刊行著作一覧」にもない。というわけで、ここで紹介した直筆原稿は、整の全集と単行本に未収録の作品だということになる。この作品を本誌に発表する前に、私は伊藤整のご子息・伊藤礼氏に許可を頂いた。曾根博義氏は、私あての手紙で、この作品について大体次のように、論じておられる。

父・伊藤昌整を介して当時の大東亜戦争と日露戦争を重ねあわせ、それまで疎遠であった父と子を結ぶ「民族の血」を確認したいという、戦争下の伊

藤整の、小説家としての、人間としての悲願に駆られて行った、日露戦争に関する調査の一環をなす原稿である。

その悲願と意図の一端は、長編『得能五郎の生活と意見』の最終章から『得能物語』で実現された。だが全体の作品化は戦後に持ち越され、最晩年の『年々の花』で不完全ながら実現された。『年々の花』の第六章に、日露開戦の様相がマクカラーによりながら詳述され、内容的にはこの原稿と重なるが、この原稿に基づいて書かれてはいない。

ひょっとすると、この原稿は、『得能物語』完成直後に構想されながら、はたされなかった長編の第一部『旅順』の草稿の一部かもしれない。しかし、それはあくまで推測である。その前に初出の探索に努力すべきであろう。

以上である。この指摘をもとに、伊藤整研究をする人は、調査・考察をすることができる。

「日露開戦譚

伊藤 整

日露戦争についての雑書を あれこれと読みあさってゐるうちに、開戦当時の旅順港の様子を推定できる二三のものに ぶつかって、興味を抱いた。

旅順はもと、旅順口と言ふのが本当の名であつたらしい。それは旧市街、つまり南面して湾に向つた東半分の、丘陵の間に出来てゐた支那街のことである。日露戦争当時は、旅順といふのは、この部分のみであつたらしい。日露戦争直前になると、この旧市街も、所謂旧市街と、それから後に出来た支那新市街との 二つの部分に別れてゐた。その中には 二本の東西大街といふの外に、砲兵町、工兵町（今の三笠町辺といふ）兵隊町（末廣町辺といふ）の外、提燈横町とか轟横町といふやうな名をつけられた各町があつた。

現在の新市街、つまり浅くって廣い西港に面した二〇三高地寄りの平地の街は、日露戦前にロシアが急に市街を造営したもので、ひっくりめてヨーロッパ新市街と言ひ、特に各通りの名は無かつた。そしてその地には、いま師範

学校となつてゐる市営ホテル、中学校になつてゐるクンストアルベルス商店、博物館となつてゐる将校集会所、高等女学校となつてゐる市役所、工科大学となつてゐる海兵團等々の大建築が出来てゐた。

日本人會事務所と三井物産の支店は 旧市街にあつた。また今の旧市街の中心地である青葉町の辺には、日本人の商店が何軒かあつた。旅順市街の真中に聳えてゐる表忠塔のある白玉山高地には、火の見があつて、火事の時は、晝間ならば赤旗、夜間ならば赤燈が そこに掲げられたといふ。また旅順港の狭い入口の両方に突き出てゐる老虎尾半島の尖端には、水雷艇の組立工場があり、本國で作つた材料を 汽車で運んで来て 組み立ててゐた といふ。手が足りないので、我國の長崎の松尾造船所から 熟練した職工を備ひ入れて 仕事をしてゐた、といふことである。

戦争直前には、在留の日本人は、ロシア人と直接には少しも悪感情を抱かずに暮してゐた模様である。ロシア人はのん気なのであるが、故国から来る新聞は、日露兩國の關係が刻々に急迫してゐることを傳へてゐた。そのため四百ばかりの在留邦人は、次第に仕事も手につかぬやうな浮腰の気分となつて来た。日本人會では、万一の場合、日本人はどういふ処置をとるべきかといふことに就いて、ドプロヌラオフ民政長官に 書面をもつて意見を求めた。長官からは、口頭で「日露の關係は、さほど心配することはない。万一不幸にして断交することがあつても、非戦闘員たる諸君に対して、生命財産を保障することは勿論、この地からの引上げを要求するようなことは無い故、安心して業務を続けるやうに」といふ返事があつた。邦人は、やや安心はしたが、更に芝罘^(註) 在留の日本領事と連絡して 万一の場合の打合せをした。すると三十七年二月七日の夜中二時頃、突然芝罘領事から日本人會宛に電報が入つた。「旅順在留の日本人は 全部引上準備をせよ。本官は 福州号をもつて迎えに行く」といふのである。

(注) ジーフー。山東省にある山の名前。酒井嬢に教わる。

この電報は ロシア文であったので、郵便局員たちは大分狼狽したといふことである。八日早朝から 居留民にこの旨を報じ、準備で大騒ぎとなった。朝十時、当時英国籍船であった福州号が入港し、水野領事、清水書記生の外領事館警部の 三人が到着した。水野領事は 大禮服で上陸し、アレキシーフ総督を官邸に訪れて、居留民を引上げさせる旨を傳へ、民政長官にも同様の挨拶をした。

午後一時頃、婦女、子供を主とし、簡単に引き上げられる者二百五十人程を 一番で収容して 福州号は、大連に向って、出帆した。この二月八日の夜、我海軍は 旅順港の敵艦を急襲撃破したのであるが、当時邦人たちは、開戦となっても、まさか旅順が真先に戦場になるなどとは 一人として考へなかつたといふ。残りの百五十人程の邦人は、多少の荷物を持ち、その夜 門司に出帆する英艦ラーズベク号といふのに乗る豫定であった。だがラーズベク号は何かの都合で、その夜は出帆しないこととなった。

それで邦人たちは、荷物と共に海岸で夜を明かすものもあり、又は 艇で寝たものもあった。旅順は、満州の地つづきであるが、北方を山で囲まれ、南方海に面してゐるので、比較的暖かく、仙台あたりの気候かと思はれるが、寒中のことであるから、海岸での野宿は相当こたへたこと と思はれる。幸に、八日の夜は、非常に暖かであった。夜更けて、十二時頃になると、急に港外で砲声が聞え、西側の老虎尾半島と東側の黄金山半島の砲大台では、二時間ぐらゐのあひだ 盛に大砲を射撃した。しかしそれは、これまで度々あった演習だと思ひ、誰一人、それが勇敢な日本水雷戦隊の 敵主力艦に対する水雷攻撃だとは気がつかなくかつた。翌九日の朝になって見ると、どうしたとか 港口に大きな軍艦が二三隻乗り上げてをり、その周囲には多数の小蒸気が集まって 排水につとめてゐる模様であった。その時になってやっと邦人たちは、日本駆逐艦の夜襲があつたことを知つた。日露戦争は始まつたのだ。

従つてラーズベク号の出帆は 見当つかなくなつた。一同は午前九時頃、相談して、アレキシーフ総督に対し「我等は如何にすべきであるか」といふ

ことを訊ねた。総督からの挨拶は、「諸君の知らるとほり、昨夜の日本軍の襲撃によつて戦端は開かれた。為に当地では豫後備兵を召集したから、それ等の者が如何なる危害を諸君に加へるかも知れない。日本人が各所に分散してゐては、十分に保護することが出来ぬから、直ちに一二ヶ所の適当な場所に集合してほしい。」との事であった。そこで 一部は満州里ホテルに、一部は今の敦賀町辺の民家に集まった。

この日の正午頃に 日本の聯合艦隊の旅順港砲撃が始まった。約一時間ばかり、敵味方の艦隊と海岸の砲台から殷々たる砲声が轟き渡った。我艦隊から撃ち出した砲弾が、市内の各所に落ちた。ロシア人の中には この戦争を見ようとして要塞司令部前の高地や白玉山などに登ったものもあり、また中には 慌てて支那町方面に逃げだしたものもあつたといふ。日本人は戸外に一歩も出ることが出来ず、今日の戦闘の勝負はどうであらうかと、大変な心配をした。

三時頃に 総督から「旅順に戒嚴令を布いた。故に外国人は二十四時間以内に この地を立ち去るべし」といふ布告が届けられた。そこで邦人の代表者が 総督府に出頭して「我々日本人の立ち退きについて 路を示してほしい」と申し出たところ、「午後四時までに 海岸に集合せよ」といふ返事があつた。一同は時間が無いので 取るものも取りあへず 四時迄に集まつたところ、碇泊中の温州号といふ汽船を指定され、全部それに乗り込んだ。船に乗りさへすれば直ちに出帆するもの と思つてゐたので、何等食糧の準備もせず、携帯水のみを持って乗つたのであるが、十四日まで そのまま留めおかれ、食糧不足に閉口した といふ。十四日になつて 北方のバルピン以南に在留してゐた邦人が 来り加はつた後、やつと 芝罘に向けて出帆したといふ。

その開戦の八日の夜、アイルランド人のフランシス・マッカラーといふのが、ニューヨーク・ヘラルドの通信記者として、旅順港にゐた。彼は 通信文を送るために、しばしば芝罘との間を船で往復し、ちょうどこの夜も、芝罘通ひのコロンビア号といふのに乗つて 港内に碇泊してゐた。十一時半頃

になって、彼は 上甲板にある自分の船室へ入らうとして、港内を一瞥したところ「墨のような」海岸は「海も陸も非常な静けさであった。鋭い北風が荒れてはみるが 山陰に居る吾等の船は、浪も小波も感じない。遠くの市街で折々動いてゐる光は、馬車の往来してゐるのであろう。その光でも無かったら、この要塞市街は、まるで墓場の入口のやうに眞暗闇であらう。遠くの海上では アンガラ号という軍艦の探海燈のみが、誰かが假睡をしながら動かしてでもゐるやうに のっそり前後を照してゐる」といふ風であった。

ところが、十一時三十分に、彼が寝ようとして船室で着物を脱いでゐるとき、三発のはっきりしない爆声が聞え、コロンビア号は大きく動揺した。それに続いて小さな砲声があった。彼は 急いで長靴と外套をつけて甲板へ出て見た。すると、港の入口から港外にかけて碇泊してゐるロシアの全艦隊が悉く探海燈を照し、海面は銀の延板のやうに見えた。そこへ出て来た英国人の船長は

「今し方始まったこの戦争のために 祝杯を挙げようぢゃないか」といふので、一同は食堂で乾杯をしたが、その席上、運轉士は

「とにかくあの最初の三発は 確かに爆声だ。しかも水雷に相違ない。船がひどく動揺したからね。水面上の爆声と水中の爆声ぢゃ、全然違ふからね」と言ふ。

機関長も

「さうさ、最初の三発は 確かに水雷だった。どの軍艦かが きつとやられたのだ」と言った。

かういふ風に船乗りたちは、この夜日露戦争が始まったことに気づいたが、その船に乗ってゐたロシア人の番兵は、ちつとも分らず、やっぱり演習だと思つてゐて、マッカーラーが 戦争が始まったと聞かせてやっても、

「なあに、演習だよ」と本当にしないのであった。

このコロンビア号は、翌朝は港から出て行かうとして、日露両国艦隊の砲撃戦の只中に迷い込み、周章狼狽した結果、僅かに事なきを得たのであった。

2 『小林多喜二全集』や単行本に未収録の、新資料。多喜二本人が執筆した文章

小林多喜二の『全集』や単行本に入っていない一文が見つかった。

それは、「前頁の文を讀みて」と題された短いものである。北方勤労界社発行の『勤労界』創刊号、にある。この雑誌は、昭和四年十月十九日印刷、昭和四年十月二十日発行とある。発行兼編輯人は、小樽市豊川町九一 満田信太郎 である。小樽市稲穂町の工藤印刷所で印刷された。発行所の北方勤労界社は、前出の満田信太郎と同じ住所である。これは全三三ページの雑誌である。

この目次を見ると、「労働団体に対する資本家の武装論」という論説が、目次の第二ページにある。その大きな活字の標題の下に、小さく「他喜志」と書かれており、あたかもその論説の筆者のようである。これは一八ページにあると記されている。

では問題の一八ページを見ると、そのとおり標題が「労働団体に対する資本家の武装論」とある。しかしその論説の筆者は、「一記者」とある。この論説が3ページにわたって書かれている。つまり、一八、一九、二〇ページである。

さて問題は、二一ページ目にある。ちょうど論説が終わったところで、次のページ、二一ページに、「前頁の文を讀みて」という7、8行の文章がある。この文章に「他喜志」と署名されているのである。

「他喜志」というのは、小林多喜二しかいないだろう。それに文章の勢いと文の言い回しの癖の点で、多喜二の筆によると、言える。完全に言えるかどうかは、決定できないが、ほとんどそうだと言える。

さて、目次に表現されているように、論説「労働団体に対する資本家の武装論」が多喜二の筆によるのかどうか、これは論説の内容から判断して、多喜二のものとは思えない。文字通り、どこかの一新聞記者が書いたのではないか。ここで、多喜二の文と思える「前頁の文を讀みて」の全文を紹介する。

ただし現代漢字で表現する。

此の一文を読んで 労働者諸君は如何なる感を抱かれるや、資本家には種々なる組合団体はある、直接手をくたさず共 法律も官権も資本家を擁護こそすれ 労働者の味方にならない、気に入らねば首を切る、同盟罷業に対抗して工場閉鎖をやる、そうして何時の争議でも大抵は労働者が泣き寝入りだ、それなのに資本家の一部には「資本家武装論」を高調して資本暴力軍を組織せんとする者がある。吾々は考えなければならない、将来は益々考えなければならない、しかし吾々の取るべき手段は やはり吾々大衆の堅固なる団結の力よりないのだ、無理解な資本家に対抗する吾等の力は……

以上である。ここから分かるのだが、「一記者」の書いた論文が『勤労界』に出る前に、多喜二はそれを読んでいるわけである。編集者と多喜二はよく知っている関係にあったのだろう。昭和四年一〇月に、この雑誌が出たことになっているので、この時、多喜二は、拓殖銀行小樽支店に勤務していた。銀行員が、こういう政治的発言を、本名で出さない方がよいと思って、「他喜志」としたのかもしれない。それにまたこれは小樽で発行された雑誌であるから、一層そうであろう。だがこの次の月、多喜二は拓殖銀行を首になるのであった。

3 大正時代末の小林多喜二の小説

はじめに

本稿をもって、さしあたり計画していた小林多喜二伝記の第3部を終了する。第1部、第2部は、すでに発表した。本稿は、小林多喜二の大正時代末の文学について語るのだが、すでに彼の評論については論じてあるので、文学=小説に限るわけである。また小樽高商時代の文学についてもすでに公表

されているので、多喜二の高商卒業後から大正時代が終るまでの時期である。

本文

小林多喜二が高商を卒業してから大正が終るまでの2、3年は、彼の文学の過渡期であった。

この時代の活動の中心をなすものは、何といても、『クラルテ』⁽¹⁾である。多喜二がこれを主宰し、発行した。彼は小樽高商時代にこれを企画していて、第1輯は1924(大正13年)4月、第2輯は同年7月3日、第3輯は9月17日、と矢継ぎ早に出版した。第4輯は翌年1925(大正14)年2月10日であって、それから発行ペースはガクンと落ちて、第5輯は1926(大正15)年3月5日の発行である。第5輯で息が切れた。

多喜二は、第1輯に「暴風雨もよい」、第2輯に「駄菓子屋」、第4輯に「彼の経験」、第5輯に「師走」を出した。第3輯にはなぜか作品を載せていない。ただし、毎号彼は「赤い部屋」を、そして「同人雑記」あるいは「編輯雑記」「仲間雑記」を書いている⁽²⁾。これらで多喜二は言いたい放題のことを言っているので、『小樽新聞』の並木凡平は、それをたしなめている。「赤い部屋」という標題は、ストリンドベルヒ⁽³⁾の「赤い部屋」からとったもので、邦訳としては阿部次郎⁽⁴⁾および江馬修⁽⁵⁾訳『赤い部屋』(新潮社 大正9年)がある。これは小樽高商の図書館に1920(大正9)年4月に記念図書として入った。多喜二はそれを読んだかもしれない。多喜二は『クラルテ』が出る度に

(1) 復刻版『クラルテ』不二出版、あり。

(2) 『小林多喜二全集』新日本出版社、第7巻。

(3) ストリンドベリ Johan August Strindberg, 1849—1912. スウェーデンの劇作家、小説家。Ibsenと並ぶ近代劇運動の創始者。ウプサラ大中退。自伝的小説『赤い部屋』1879、『令嬢ジュリー』1888。

(4) 阿部次郎(1883—1959)、哲学者・美学者、『三太郎の日記』(1914)。東北大で教えた。

(5) 江馬修(えま ながし, 1884—1975) 作家、日本プロレタリア作家同盟に所属した。

小説を姉・妹が母に読んで聞かせた。ただし『駄菓子屋』では、母は、いくら小説だといってもそんな嘘を書いては駄目だ、と文句を言った。

1924（大正13）年には、多喜二は小説「ある改札係」（『小林多喜二全集』（以下、『全集』と略す）第2巻、所収）を書いている。この年6月に『文芸戦線』が創刊された。

1925（大正14）年には、小説「田口の『姉との記憶』」（『全集』第2巻 所収）を書いて、後に、『北方文芸』1927（昭和2）年6月に出した。そのノート稿の次ページに残されているノート稿「生まれ出ずる子ら」についてが、ある。1925（大正14）年6月中旬までに書かれたものと推定されている⁽⁶⁾。あるいは6月筆とされる。そこでは、実際は「田口の『姉との記憶』」の生誕史を書いている。多喜二は書く、「自分はこの頃書く方のことでは、随分怠けていると思った。一月に「彼の経験」を書いたきりである。半年にもなる。」⁽⁷⁾ その通りであり、多喜二は、「彼の経験」を『クラルテ』第4集（1月14日）に出した。そして随分間をおいて、4月から6月にかけて「田口の『姉との記憶』」を書いている。これは、鯉場へ働きに行く「姉」についてゆく話である。続いて書く。「自分はあせり出した。毎日のグダヘシした生活が恐ろしくなった。」⁽⁸⁾ 「自分は学校時代の真純な、そして猪突的なときが、羨ましくなった。」

「生まれ出ずる子ら」は、多喜二が庁商を出る頃につくった回覧ノートである。彼はこれを復興しようとしたのだが、なされなかった。実際は多喜二は、その試みを「田口の「姉との記憶」」だと見なしている。「田口の「姉との記憶」」の題材は4月の初め頃もった。だが書けなかった。5月の初め冒険を試みることにした。「姉」は今までのものと反対である、と多喜二は書いている。「あらしもよい」「彼の経験」と丁度正反対に置かるべきものである⁽⁹⁾と。

(6) 『全集』第5巻、解題、495ページ。

(7) 第5巻、440ページ。

(8) 同、440ページ。

(9) 同、442ページ。

だが、我々読者にはほとんど同一線上にあると、読める。

多喜二は、1925（大正14）年3月には上京して東京商大を受験しており、その直前では受験勉強をしているから、忙しい。なおこの年の社会状況について言えば、小樽総労働組合が、1925（大正14）年8月に創立された。それが翌年1926（大正15）年4月に、小樽合同労働組合へと改組された。もちろん、多喜二はまだこれに直接の関心をもっていない。

この年、「龍介の経験」を書いた。これは翌年1926年7月に改作して「And Again!!」（『全集』第7巻 所収）とした。それによってかなりよくなった。

多喜二は瀧子とつき合ううちに、恋愛物から娼婦物へ書き移った。その方がテーマは深刻であり、社会性もより持っている。

彼の娼婦物の初めの作は、「曖昧屋」（第2巻所収）であり、1925（大正14）年11月19日に脱稿したノート稿である。だから発表されなかった。主人公「妾」（わたし）—— タッチャン、と呼ばれている —— は、瀧子をモデルにしている。「ターさん」は多喜二である。多喜二は、瀧子がいるヤマキ屋へ通って娼婦の内情を色々聞いた。ここではもちろん小説だから、内容はデフォルメしてある。これは、曖昧屋の生活の物語であり、短編小説としてとてもよい。これは改作されて「酌婦」（『全集』第7巻 所収）となった。多喜二もそう言っている。だから、「曖昧屋」→「酌婦」→「瀧子其他」（『全集』第2巻 所収）となったことになる。しかし、「曖昧屋」と「酌婦」とでは筋が違う。改作とされているが、ほとんど別個の作品である。さて「酌婦」は発表されなかった。多喜二はこれを瀧に読ませたことがあるらしい。この「酌婦」は「瀧子其他」と同じ筋で、後者は前者の改作である。そして後者は発表された。「酌婦」は、3人の酌婦の話であり、多喜二が瀧子と一緒に住んでいる時代で、1926（大正15）年8月10日の作である。

1926（大正15）年に、シナリオ「来るべきこと」（『全集』第2巻 所収）を原稿帳に書く。「師走」の改作（『全集』第2巻 所収）も8月3日に作った。そして内容が豊富になった。

小説「父の危篤」は、こうだ。父が息子の結婚をかつて反対し、息子が父

との愛情を考える。父の危篤の電報で、汽車にのって父に会いに行く、という話である。これはフィクションである。多喜二は、父とそのようなトラブルを起こしていない。小説の中間部に、多喜二が高商を受験したころの思い出が入っている。それはかなりの部分真実である。瀧子が家にいる時分、1926（大正15）年8月4日にこれを脱稿し、金沢の『原始林』16輯（1926年9月号）に出した。多喜二の父は、2年前の1924（大正13）年に亡くなっていた。この小説の制作動機はそれにあるが、話の筋は現実とは違っている。

葉山嘉樹の『淫売婦』を、多喜二は勝見 茂から借りて、読んだ。そういう意味で、勝見は多喜二にとってリーダーであった。勝見は三吾と知り合い、そして多喜二とも知り合う。勝見は店の用事で毎日銀行へ行ったから、カウンターにより掛かって、多喜二からいろいろな話を聞かせてもらった。

多喜二の小説「人を殺す犬」が、小樽高商の『校友会々誌』に載った。これは多喜二の初期の名作に入れることができる。そして文章家としての実力はこれについていることがわかる。『防雪林』のサケの描写、『三・一五』の拷問の描写は、リアリズム小説の彼の腕の確かさを示しているが、「この人を殺す犬」で、多喜二の力がダテではないことが立証された。

当時、手宮の豊川町あるいは錦町に住んで、北海道銀行に勤めていた川崎春江さん（92歳で亡くなる）は、この頃の多喜二の小説に出て来るが、違って描かれた、と言った。そういうことは、もちろん多々ある。

このころ多喜二の日記の中に、「ソヴェト文学をきくため高崎君の家に行く」とある。よく遊びにいったらしい。飯坂がその高崎徹から聞いた話は、こうである。

高崎は酒豪だった。多喜二は二本も飲むと朗らかになって面白い話をしていった。自分の顔は表が裏みたいだと言った。こういう表現はストリンドベリに没入していたことからのものらしい。ともかく多喜二という人は、いろいろな作家に没入しながら、そこから抜け出し、独自のものを創るといった素直で幅広い探求心、強烈な意志、気迫ある独創力をもった人だった。「将来とも、どこまで伸びるか底知れぬ作家で偉い人物、惜しい男だった」⁽¹⁰⁾。

むすび

多喜二は、1926（大正15）年8月15日に日記を書いている。

……「師走」を書くときも、古くは「駄菓子屋」を書くときも、自分の意識は、「救い」だった。そういう生活に一導の光明を与えたいという気持ちだった。「曖昧屋」は最後はそういうことの暗示を与えて終らしてある、然し、今度それ等を書き直しているうちに、事實は反対の方へ行く事だ。救いを出そうとすると、それが、こんな生活の場合うそのように思われる。……

前者の場合も、救おう〜として哲夫（小説の主人公——引用者）には結局何も出来なかったこと、後者（「曖昧屋」——引用者）では、救いを求めて、逃走をした初恵が又、もどされて来る、瀧子は「世の中が初ちゃん一人位を引き倒すなんて朝飯前だ」と云っている。……

個人の力の強さ、と生活の力の強さのストラグル！そして、そこにどうしても超人を産み出して救いを出そうとして、出来ぬ気持ち……。云わばドストエフスキー⁽¹¹⁾終生のテーマだった汎愛思想と、超人（人神）思想のストラグルが自分にもあることだ。シャルル・ルイ・フィリップ⁽¹²⁾にもあったことだ。そして自分は、極く自然に、理論からも、好みからでもなく、地のまゝに、フィリップに近く、ニイチェ⁽¹³⁾に近い。だから自分としてはドストエフスキーが好きでならないんだ⁽¹⁴⁾。

小林多喜二の小説は、「防雪林」や「三・一五」の以前は、「人を殺す犬」のような幾つかの例外を除けば、大したことはなかった。少なくとも、日本文学史上の名作は書いていないと言ってよい。つまり、ここで扱った大正時

(10) 飯坂久男「多喜二文学とあの頃の学友達」（『緑丘』42）44ページ。

(11) Dostoewski, 1821-81.

(12) Charles Loui Philippe, 1874—1909. ポピュリスト＝民衆作家として活躍。「ビュビュ・ド・モンパルナス」1901年。

(13) Nietzsche, 1844-1900.

(14) 『全集』第7巻、36ページ。

代の彼の文学のことである。

それに、上の日記でも分かるように、多喜二は普通の文学青年である。プロレタリア文学にまだ足を入れていない。だが後に示されることになる力量は、技術的には潜在的に持っていた。

問題は、彼のテーマ=題材である。多喜二は、小説のために、これまで、身の生活上の題材を探しもとめていた。田口瀧子に会う前は、娼婦物を書いていない。ちょっとした恋愛、学校教師、若い友人、家族の周辺の、小さなテーマである。だが彼は、非常に強烈な人間存在である娼婦の存在を知り、それを意識して、テーマに求めた。これは自然であるし、自然のなりゆきでもある。普通の人間にとっては、娼婦は、いわば、非日常の生活だからである。多喜二は、かなりの間、娼婦物の作家と見られた。多喜二は、娼婦物以前の小説でも、社会的作品を少しは書いた。もちろん多くは、そうではない。しかし社会科学を学んだ者として、社会に興味がないはずはなかった。そこに現れた娼婦の社会は、社会の矛盾が最も集中しているところであった。だが昭和2年の社会科学の勉強によって、今度は多喜二は、労働者問題・社会主義運動に目覚め、社会の集中的矛盾の場として、労働者・社会主義の運動を見、娼婦のテーマを離れて行く。それが彼の昭和時代の文学である⁽¹⁵⁾。

いわば、大正末の彼の文学=娼婦物は、それへの、本格的な多喜二文学への媒介であった。したがって田口瀧子の存在は、多喜二本人は気が付いていなかっただろうが、小説家としての彼にとっては大きかったのである。

追記

小生の小林多喜二伝の「第1部 高商以前」は、次のように読んで頂きたい。

- 1 「小林多喜二伝——多喜二と小樽——。小樽移住から小学校卒業まで」（小樽商科大学『人文研究』第86輯，1993年8月）。

(15) ただし「雪の夜」のように、昭和時代でも娼婦ものを書いてはいる。

- 2 「小林多喜二伝——多喜二，庁商へ——。小学校時代から，庁商時代の前半」（『人文研究』第87輯，1994年3月）。
- 3 「小林多喜二伝——小林多喜二と小樽——。庁商の時代，後半」（『人文研究』第88輯，1994年8月）。

第2部 高商時代 は，次のように読んで頂きたい。

- 4 「小樽高等商業学校と渡辺龍聖初代校長」（『商学討究』第44巻第4号，1994年3月）。
- 5 「小樽高商入学の小林多喜二」（『商学討究』第45巻第3号，1995年1月）。
- 6 「小樽高商の先生たち」（『商学討究』第45巻第1号，1994年8月）。
- 7 「小樽高商の第1期」（『商学討究』第46巻第1号，1995年8月）。
- 8 「小樽高商の第2期」（『商学討究』第46巻第2・3号，1996年2月）。
- 9 「小林多喜二の小樽高商卒業」（『商学討究』第45巻第4号，1995年3月）。

第3部 拓銀時代の 大正時代は，次のように読んでいただきたい。

- 10 「小林多喜二と拓銀就職」（『人文研究』第89輯，1995年3月）。
- 11 「小林多喜二の恋」（『人文研究』第90輯，1995年8月）。
- 12 「小樽高商軍教事件 上」（『商学討究』第47巻2・3号合併号，1997年1月）。
- 13 「小樽高商軍教事件 下」（『商学討究』第47巻4号，1997年3月）。
- 27 これに続いて，「小樽の三・一五事件，および補遺 小樽高商軍教事件続」（『商学討究』第49巻2・3号）の補遺2。
- 14 「大正時代の小林多喜二の評論活動と彼の思想」（『商学討究』第46巻4号，96年3月）。
- 15 「大正終わりの多喜二」（『人文研究』92輯，1996年）。
- 16 本稿の3。

第4部 拓銀時代の昭和時代 は、すでに相当部分が公表されている。以下のようなになる。

- 17 「昭和の初めの小林多喜二」(『人文研究』93輯, 1997年3月, 1997年3月)。
- 18 「不在地主——磯野農場小作争議 上」(『商学討究』第48巻第4号)。
- 20 「小林多喜二の昭和時代, 拓銀時代」(『人文研究』94輯, 1997年8月)。
- 22 「小林多喜二と社会科学研究会」(『商学討究』第48巻2・3号, 1998年1月)。
- 25 「昭和時代, 小林多喜二の文学上の営為」(『人文研究』96輯, 1998年)。
- 26 「総選挙と三・一五」(『商学討究』第49巻第1号, 1998年7月)。
- 27 「小樽の三・一五事件, および補遺 小樽高商軍教事件 続」(『商学討究』第49巻第2・3号)の前半。

その他, 次の3つの拙稿がある

「小林多喜二『蟹工船』読者感想」in: 『人文研究』78輯, 1989年8月。

「島田正策小伝」in: 『人文研究』79輯, 1990年3月。

「小林多喜二のフェミニズム——小林多喜二と田口瀧子との愛」in: 『世界文学』78, 世界文学会, 1993年12月15日。